

氏名	シャ 謝	シン 振	ハツ 發
学位(専攻分野)	博士(文学)		
学位記番号	文博第402号		
学位授与の日付	平成19年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
研究科・専攻	文学研究科思想文化学専攻		
学位論文題目	北響堂山石窟北洞・中洞・南洞の研究		

論文調査委員 (主査) 教授 曾布川寛 教授 根立研介 助教授 宇佐美文理

### 論文内容の要旨

本論文は、東魏・北斉時代の鄴都仏教美術の成立問題に焦点を絞り、北響堂山石窟の北洞、中洞、南洞における石窟の構造、仏像様式、図像学的な表現、仏教石経などについて、文献史料と石窟造像の実状の双方から総合的に検証することにより、北洞から中洞、南洞までの一連の展開過程を分析し、北魏から唐代への過渡期とされる東魏・北斉仏教美術の形成の実態を明らかにしたものである。本論文は「序論」、全四章から成る「本論」、及び「結論」の六部で構成される。「序論」において、先行研究、問題提起、および研究方法に触れる。以下、「本論」の章ごとに内容の要旨を述べる。

第一章「北響堂山北洞、中洞、南洞三大窟」においては、自然と人為による甚大な破壊を蒙った三大窟の現状を報告するとともに、これまで余り言及されることのなかった北洞前壁の供養者像からなる礼仏図、南洞外部の唐邕刻経などの実状を明らかにする。同時に、各石窟の甚だしく損壊した外部の構造や、破壊された内部の仏像について精査し、当初の石窟の原状に関する復元作業を試みる。その結果、石窟の外部構造については、この三つの窟は形式が同じで、上から覆鉢式の塔形、瓦葺きの屋根、窟前面から構成されていることが判明する。こうした木造建築を模した瓦屋根の上に、更に大きく塔形を表現するという外部構造は、南響堂山石窟、水浴寺石窟など鄴都近辺の北斉後期の諸石窟に大きな影響を与えた。また現存する仏菩薩諸像の欠損状態を詳しく観察することにより、北洞方柱仏龕の二つの菩薩像の頭部が現在ペンシルヴァニア大学博物館に所蔵されていることを割り出すとともに、これらの菩薩像頭部にみられる眉間の白毫相や、グプタ彫刻の仏像から影響を受けた容貌の表現方法など、様式上の特色を明らかにする。

第二章「造窟の事情と鄴都仏像様式」では、文献史料と造像の両面から、北洞、中洞、南洞の造営事情を検討することにより、その仏像様式・形式の一連の展開過程を考察する。『統高僧伝』や『資治通鑑』などの記事やその他種々の史料の分析を通して、北洞は東魏・武定5年(547)から北斉・天保3年(552)にかけて、東魏の実権者かつ北斉政権の樹立者ともいえる高歓を追福するために造営されたもの、中洞は天保年間の後半に北斉初代の文宣帝(在位550-559年)によって建立されたものであることを論証する。また、北洞、中洞の方柱に彫り出された通肩の如来像や上半身裸の菩薩像は、グプタ様式の影響を受けたものと言われるが、実際は、こうしたグプタ様式を受容は、北魏末から東魏初期の、衣文が二本の平行線によって表された中国風の通肩の如来像、あるいは南朝造像からの影響を受け胸から腹部まで膨れた裸形の菩薩像に遡り、しかも武定元年(543)銘造像碑(メトロポリタン美術館所蔵)にはすでにこのような仏菩薩像が形成されていたという。なお、天保年間の後半になって、北洞、中洞と異なり、大衣を身体に密着して何の衣文も表されていない如来像や、華やかな装身具を飾った新しい形式の菩薩像が、山東省の青州を中心に成立しつつあったという北斉様式の多様で複雑な実態にも注目する。

これに対し、最も規模の小さい南洞に関しては、唐邕の刻経を手がかりとして、安陽の小南海中窟や靈泉寺などにおける石経の配置場所の選定の仕方、および「唐邕刻経記」の中に先帝の文宣帝を転輪王として褒め称える刻銘を併せ分析すれば、それが国家的な造営事業ではなく、560年代の皇位継承の混乱を極めた北斉後期に、文宣帝の側近であった唐邕などが先帝

への追善供養として営んだものと推定する。つまり、北洞、中洞から南洞に至る仏像様式・形式上の急激な変貌については、単なる時間的経過による単線的な展開様相としてのみ考えるべきでなく、石窟の造営者の違いという視座を加えて検討し、北洞・中洞にみる優美で先進的な仏像彫刻が朝廷に仕える仏師によって制作された中央作であるのに対し、左右対称性を守ったり硬直した体軀造形という形式化した傾向を示す南洞の諸像は、地元の人々によって開鑿された南響堂山石窟や水浴寺石窟などと同様に、鄴都近郊の地方作であったと解するのである。これと関連し、北洞・中洞にみられる柱を背負った畏獣や、腹前で長剣を突く甲冑形の守護神など、墓葬装飾を担当した官営工房との交流に由来するモチーフや造形的な表現が、南洞などの諸窟に全くみられないという不連続性の一面も、有力な示唆を与えてくれる。

第三章「龕像と塔形装飾から成る諸仏世界」では、図像学的な特徴を有する個別の尊像と石窟全体の尊像構成の両面から、北洞と南洞の二つの窟の尊像構成、及び中洞を含めた外部の塔形装飾の図像学的な意味を考察する。まず、北洞の方柱三面大龕の中尊如来半跏像と如来倚像の尊格、周壁の十六仏龕の構成意味を検討し、北洞では、方柱の半跏像、坐像、倚像からなる過去・現在・未来の三世仏と、『法華経』に四方四隅を象徴する十六王子仏という空間的な諸仏との二系列の図像学的な配置を通じて、整然たる諸仏世界を表したものと解する。また南洞の左右壁の一仏二比丘形二螺髮形二菩薩像からなる七尊形式については、僧服をつけた螺髮形という中央の脇侍像をめぐって東魏・北齊の作例を詳しく分析検討することにより、水野清一氏の主張した縁覚像説を踏襲し、声聞・縁覚・菩薩の三脇侍像を奥から順に配し、『法華経』の三乘帰一という教義を表したものであるとする。また南洞上方には塔形の龕が開かれ、そこに『法華経』の説法を象徴する二仏並坐像が配されている。二仏並坐像は『法華経』の普遍的な真実性を証するという法華信仰を示す一方、その時間的・空間的に限界を超えるイメージは、永遠不滅の仏身・法身の当体である仏塔の象徴的な意義と合致するとし、鄴都周辺諸石窟の独特な塔形という装飾意匠が示す内面的な意味を考察する。

第四章「南洞の北齊石経その造営形態」では、唐邕の刻経を中心とする南洞の諸石経について、その甚だしく磨滅した部分の原状を復元するとともに、天統4年(568)から武平3年(572)にかけて、唐邕が前廊周壁に『維摩詰経』を刻した後、次に窟外北側の摩崖を切り開いて『勝鬘経』と『字経』の二部を刻み、最後に窟前面北側の外壁に回向の願目として『弥勒成仏経』を追刻したという一連の造営過程を明らかにする。さらに、唐邕自身の伝記や、各經典の教義と流布状況を詳しく調べた史料的考察の上に立って、いかにして諸石経が夥しい經典の中から選出されたかという理由、その壁面に配置された図像学的な意味などを分析する。

まず、武平元年に唐邕が免官処分を受けた時、『字経』を刻むことによって、主人公の字の物語と自分を重ね合わせ、暗に武成帝・後主父子を批判したという特別な選択事由を見出す。次に、北朝後期に『維摩経』と『勝鬘経』二部の伝習が、主に地論宗南道派を中心に行われ、特に文宣帝の門師であった法上がこの二部經典を好み、法上臨終の際にも誦持し続けられたことを指摘する。それゆえ南洞の刻経事業については、文宣帝の側近や門師の法上と密接な関連があったことを推測する。一方、南洞内三壁の諸仏龕とともに整然と配された前壁の『無量義経』讚仏偈及び前廊部の『維摩経』の二つの石経については、北朝石窟中における諸尊の配置状況と比較することによって、それぞれ供養者像から成る礼仏図、維摩・文殊の問答図の壁面配置に対応するという関係を見出し、その図像学的な意義を確認する。また、窟前面両側の外壁に弥勒、阿弥陀信仰の『弥勒成仏経』『無量寿経論』の二部石経を表していることは、実は、当時流行した石窟内の左右側壁に弥勒と阿弥陀像を一对として配する表現に対応しているとする。つまり石経は経文偈句でもあり、石窟中の曼荼羅的造形と同じく、厳然たる仏の世界を示すという体系的な理念に即して選択し配置されて、それぞれが刻み出されたものとするのである。

#### 論文審査の結果の要旨

中国の仏教美術は北魏と唐代に偉大な仏像様式を打ち立て、東アジア全域に多大の影響をもたらしたことが知られるが、北齊時代はその中間に位置し、北魏から唐への様式の大転換に当たって頗る重要な役割を果たした。特に河北省邯鄲市の鼓山に営まれた南北の響堂山石窟、とりわけ北響堂山石窟は朝野を挙げての旺盛な仏教信仰を背景に、主に皇帝の主動で開鑿が行われ、大規模かつ画期的な造像を出現させた。その造像内容はアジアにおいて6世紀半ばの北齊が置かれた状況、また南朝との関係などを敏感に反映すると同時に、当時の貴族社会における仏教信仰を雄弁に物語り、時代をリードするものであった。本論文はこの北響堂山石窟の北洞、中洞、南洞の三大窟に焦点を絞り、数次にわたる綿密な現地調査に基づいて、

各々の窟の構造、仏像、装飾文様、石経などを取り上げ、作品、文献史料を博搜して、様式論、図像学、経典論などの観点から総合的に論じている。そこには、従来の響堂山石窟研究に付け加える新しい成果が多々みられ、石窟研究に重要な貢献をなしたものと評価しうる。

論文全体は四章から構成され、まず第一章では、基礎作業として響堂山石窟の現状が報告される。響堂山は長年にわたる自然による風化と、20世紀初めの人為的破壊により、甚だしい損壊を被っているが、その現状を細部にわたって克明に調査し、場所によってはその復元的試みがなされる。例えば北洞内前壁の礼仏図、方柱上方の仏龕、南洞外壁の唐邕による石経、そして三窟に共通した外壁上方の覆鉢式塔形などである。これらは、従来さまざまな制約によって厳密な調査のこなわなかった箇所であり、いずれも石窟の構想と大きく関わっているだけに、その報告は甚だ貴重である。また欠損した仏像の頭部などの復元に当たっては、世界各地の美術館が収蔵する北朝作品の中から、慎重な手続きを経て割り出し、合成した復元像を制作している。

次に第二章では、三大窟の造営事情とその仏像様式が述べられる。従来は三大窟ともに北齊朝廷により造営され、北洞は東魏の実権者高歡、中洞はその息子高澄、南洞は文宣帝高洋のために造営されたものとほぼみなされてきた。これに対し論者の所説の特徴は、供養の対象者は同様であるものの、最も早い北洞の造営は東魏末から北齊初めとしたうえに、北洞、中洞の二窟と南洞を仏像様式、造営者の上からはっきり区別したことで、前者の華やかで先進的な様式は宮廷の造営によるものであり、後者の保守的で形式化した様式は唐邕など文宣帝の嘗ての側近たちによるものであるとする。この論証のためには、文献、造像記などの資料による考証はもとより、東魏、北齊時代の単独仏を含めた仏像遺品を駆使した厳密な様式論が展開される。特に北洞、中洞の造像のなかでも際だって目立つ上半身裸形の菩薩像については、東魏の武定年間に既に見られ、インドのグプタ様式を受け入れた南朝造像の影響によるものだという傾聴すべき見解を示している。

第三章は、三大窟の造像を図像学的に考察する。北洞は中心に位置する方柱の三面に龕を開き、それぞれ右龕に半跏仏、正面龕に坐仏、左龕に倚坐仏を配しているが、これらを過去・現在・未来の三世仏と考証し、更に周壁の16の塔形龕については、『法華経』化城喻品に説く四方の十六王子仏とし、両方で仏世界の時間的空間的広がりを示すものとする。また南洞は、上方の覆鉢式塔形意匠については、内部に二仏並坐像を配するところから『法華経』見宝塔品に基づいて、永遠不滅の佛身、法身を表し、更に下方窟内部の三壁に開かれた龕の中尊左右脇侍の比丘、螺髻形比丘、菩薩像については、『法華経』譬喻品に説く比丘・縁覚・菩薩の三乗帰一の教義を表したものとする。このように北響堂山、特に南洞と『法華経』との関連を示して、法華信仰の現れと解釈する。単なる造形論にとどまらず、造形が有する内面的な意味にまで踏み込んでいる。

最後に第四章は、北齊貴族唐邕による南洞外壁の石経について述べる。『維摩詰経』『勝鬘経』『字経』『弥勒成仏経』の各経が選ばれた理由を探り、刻経の順序、配置位置などからその図像学的意義を考察する。とりわけ本生經典の『字経』に説かれる字と唐邕自身が共に失脚を味わった経歴を重ね合わせ、『字経』の刻経には武成帝、後主父子への諷刺の意味が込められていたとする見解は、論者独自の説であり、それを一つの根拠にまた南洞の文宣帝側近造営説も主張される。またこの時期、鄴都周辺の石窟において、窟の主尊を釈迦もしくは盧舎那仏とし、左右壁に阿弥陀仏と弥勒仏を配する造形が見られるが、南洞でも外壁の右側に『弥勒成仏経』、左側に『無量寿経論』を刻したのはそれと同様の配置であるとし、更に窟内前壁の『無量義経』と礼仏図、前廊部の『維摩詰経』と文殊・維摩説法図を結びつけるなど、造像と同様に配置の面から石経の図像学的意義を探ったのは興味深い手法である。

このように本論文は随所に独自の説がみられ、水野清一、長廣敏雄両氏の『響堂山石窟』を嚆矢とする響堂山石窟研究にまた貴重な一歩を記したものと見える。しかし、所説にはなお未熟な点もみられ、特に当時の皇帝観や末法思想の流行などに対する歴史認識については、なお一考の余地があると思われる。無論それらの問題点の解決は論者が今後の課題とすべきものであり、本論文そのものの価値を大きく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2007年2月19日、審査委員3名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。